

# 学習意欲・学力低下に関する大学教員の自由記述分析

—— 2004年の国公立大学における教員調査をもとに ——

西郡大, 木村拓也, 佐藤洋之 (東北大学大学院教育情報学教育部),  
倉元直樹 (東北大学高等教育開発推進センター), 柳井晴夫 (聖路加看護大学)

2004年に全国の国公立大学教員に対して実施された学習意欲・学力低下に関する調査の自由記述回答を分析した。その結果, プリコード形式の調査項目からは得られない大学教員の意見がカテゴリーとして抽出された。特徴的なものに, 学力・意欲低下の学生間や大学間における格差, 大学進学率の上昇に伴う学力・意欲低下といったカテゴリーが挙げられる。さらに, 教育政策から入試方法, 社会の風潮に至るまでの改善提案や期待に関わる意見が見出された。

## 1 はじめに

1990年代後半, 「分数ができない大学生」(岡部・戸瀬・西村, 1999)の出版を発端に, 大学関係者から学力低下に関する問題提起がなされた。これは, 従来 of 学力低下論とは異なる今日の学力低下論の特色として, 重要な意義を持っているとされる(中野, 2002)。

こうした問題に対し, 大学生のどのような学力がどの程度低下しているのかなどの実態を把握するための調査として, 大学入試センター及び大学入試センター研究開発部による1991年の国公立大の教員・学生に対する調査(柳井他, 1993), 1998年の国立大学全学部学部長に対する調査(鈴木他, 2000), 2002年の全国国公立大学学部生に対する調査(柳井他, 2002)が行われた。そして, 2003-05年度には, 上記調査を踏まえた日本学術振興会科学研究費「大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究」(研究代表者, 柳井晴夫)に基づく調査研究の一環として, 全国国公立大

学に所属する大学教員への調査(以降, 「2004国公私」調査と呼ぶ)が実施され, 一般的な傾向として, 学力低下が大学教員に意識されていることが報告された(柳井他, 2006; 石井他, 2005)。

しかし, 「2004国公私」調査結果に対する分析の対象は, 構造化された質問項目への回答に対する分析が大半を占め, 同調査の一部である自由記述形式の回答は補足資料(柳井, 2006)として提供されているのみで, 分析されていない。柳井他(2006)は, 今後の課題として, 「自由記述欄」の回答を分析し, 調査の質問項目に含まれていない新たな質問項目を探っていくことの必要性について触れている。

そこで本研究では, 「2004国公私」調査における自由記述形式の回答を内容的に検討し, 構造化された質問項目に対するデータからは読み取れなかった大学教員の意見を分析することを目的とする。

## 2 方法

本研究では、「2004 国公私」調査結果の一部を利用した。調査内容および結果の概要は、石井他（2005）に報告されている。調査は以下の要領で実施された。

対象学部は、全国国公立 408 大学・600 学部<sup>1)</sup>であり、同学部に所属する教員（教授・助教授）である<sup>2)</sup>。全体で約 25,000 名に調査票が送付された。

調査時期は 2003 年 12 月～2004 年 1 月であり、各大学学部の入試事務室を通して調査票の配布・回収を行った。回答方法は無記名、マークシート方式である。

調査票は、第 1 部が「学習意欲等に関する質問項目」、第 2 部が「学生の学力低下等に関する質問項目」、第 3 部が「自由記述」という 3 部で構成されている。なお、フェイスシートでは、1) 性別（①男、②女）、2) 所属大学（①国立大学、②公立大学、③私立大学）、3) 年齢、4) 大学教員経験年数、5) 現在の所属在職年数、6) 所属する学部系統（1:法学系、2:経済・商学系、3:文学系、4:社会学系、5:教育学系、6:外国語学系、7:教員養成系、8:理学系、9:工学系、10:農・獣医・水産学系、11:医学系、12:歯学系、13:薬学系、14:保健・看護学系、15:介護・福祉学系、16:家政・生活科学系、17:芸術学系、18:体育学系、19:情報学系、20:その他）、7) 専攻の専門分野、8) 担当する学部学生の学年について回答を求めている。

本研究では、フェイスシートの 2) 所属大学、6) 所属する学部系統の 2 つの項目と第 3 部の自由記述の回答部分を利用する。質問内容は、「J.大学生の学習意欲・学力低下について感じるものがあれば、マークシートの回答欄に具体的に記入してください」と記されている。

### 2.1 手続き

「2004 国公私」調査で得られた調査票の回収数は 11,481 名（回収率約 45.9%）であった（石井他、2005）。この回答者の中から、第 3 部の自由記述の質問項目に回答している 2,526 名（回答率約 22%）を分析対象とした。

豊田・前田（1994）によれば、自由記述形式の長所として、多肢選択方式、複数回答形式、順位回答形式といったプリコード回答形式と比較して、調査者側が見落としていた重要な視点の提供や、動機付けの高い回答者から得られた自由記述の内容には、プリコード形式の項目のデータよりもしばしば情報の量が多いことがあるとされる。したがって、こうした自由記述の長所を活かすために、「2004 国公私」調査のプリコード形式の質問項目に伴う影響を出来る限り受けないように留意した。

まず、「2004 国公私」調査に関する報告書や論文<sup>3)</sup>については一切目を通さず、分析対象の自由記述回答のみ、全回答に対して、どのような意見が含まれているかを抽出し、それを観点別に分類した上でカテゴリー化した（表 1）。次に、評定基準（表 1）に基づき、各回答に、先に規定したカテゴリーが要素として含まれているかを 1 人の作業者が目視評定を行い、カテゴリー別の評定数を集計した<sup>4)</sup>。評定数の多いカテゴリーは、回答者の関心が高いものと考えられ、そのカテゴリーが含意するものの強さを反映している。反対に、評定数が少ないカテゴリーでも、調査で使用された質問項目とは違った新たな視点や要素である可能性が考えられる。

表1 観点・カテゴリと評定基準

| 観点       | カテゴリ                  | 評定基準  |
|----------|-----------------------|---|
| 学力低下の有無  | 有り                    | ・学力低下している<br>・実感がある   |
|          | 無し                    | ・学力低下していない<br>・実感が無い<br>・向上している                                   |
|          | 分からない                 | ・判断できない/回答が難しい<br>・疑問に思う  |
| 意欲低下の有無  | 有り                    | ・意欲低下している<br>・実感がある   |
|          | 無し                    | ・意欲低下していない<br>・実感が無い<br>・向上している                                   |
|          | 分からない                 | ・判断できない/回答が難しい<br>・疑問に思う  |
| 低下している能力 | 基礎学力                  | ・読み書き計算<br>・各学部的基础となる能力<br>・教養の不足                                 |
|          | 国語力                   | ・読解力<br>・記述力、文章力の欠如   |
|          | 論理的思考                 | ・思考力<br>・問題点を明確にする力   |
|          | 伝達能力                  | ・表現力、プレゼン能力<br>・コミュニケーション能力                                       |
|          | 忍耐・集中力                | ・我慢ができない<br>・持続力の欠如   |
|          | 学力、意欲の格差              | ・学生の質二極化<br>・バラツキ、格差  |
|          | 大学間格差                 | ・勤務校と他校の差の実感  |
| 問題点      | 主体性の欠如                | ・消極的<br>・自立心の欠如<br>・向上心の欠如  |
|          | 学習方法の無知               | ・自学自習ができない<br>・勉強の習慣の欠如   |
|          | 学力以前の問題               | ・学生の態度(倫理、モラル)<br>・勉強嫌いの学生の入学<br>・集中力、持久力の欠如                      |
|          | 大学の現状                 | ・人的・財政資源の閉約<br>・不適正な学生の入学の是認<br>・大学の教育の質の低下<br>・大学の経営<br>・大学教員の職務 |
|          | 目的、目標、動機              | ・目的の方向性<br>・夢、希望の欠如   |
|          | 大学入試                  | ・受験科目数の減少<br>・入試方法の多様化  |
|          | 科目選択制度                | ・受験選択科目<br>・履修科目  |
| 背景・原因    | マークシート方式              | ・選択方式   |
|          | ゆとり教育                 | ・行政が推進したゆとり教育   |
|          | 知識軽視                  | ・反復学習の不足<br>・基礎学力の訓練の不足   |
|          | 大学入学以前の教育             | ・受験模倣型の教育<br>・受験勉強の弊害<br>・暗記としての勉強<br>・学習時間の減少<br>・教員の質、量的な不足     |
|          | 進学率の上昇                | ・少子化<br>・大学の大量化、入学容易化<br>・入学定員数の増加                                |
|          | 大学入学以降の教育             | ・講義内容やカリキュラム<br>・教員の質、講義のやり方<br>・卒業が容易                            |
|          | 学習環境の変化               | ・技術の発展に伴う変化<br>・情報過多  |
|          | 社会構造、風潮               | ・学校教育以外のもの  |
|          | 大学入試の改善               | ・大学入試全体<br>・入試、履修科目を含む  |
|          | 試験形式の論述、記述化           | ・試験の回答形式<br>・センター試験改訂<br>・センター試験批判を含む<br>・センター試験限定                |
| 提案・期待    | 基礎学力の充実化              | ・教養(教育)の必要性<br>・各学部で必要な基礎学力<br>・基礎科目(知識)の重要性                      |
|          | 卒業認定の厳格化              | ・卒業試験を行う<br>・大学教育を厳格化<br>・教員の意識改革                                 |
|          | 大学教育の全単、「大(大学側の自助努力)」 | ・リカレント教育、FDの必要性<br>・少人数、習熟度別学習<br>・講義や教員の評価制度<br>・高大連携、カリキュラム充実   |
|          | 大学入学以前の教育改善           | ・小、中、高の教育の充実化   |
|          | 家庭教育、環境の改善            | ・学校教育に対するもの   |
|          | 大学の淘汰                 | ・入学定員の削減  |
|          | 大学の役割の再考              | ・大学の役割の変化   |
|          | 社会構造、風潮の改善            | ・社会的風潮も含む<br>・社会構造の抜本的改革  |
|          | 精神論                   | ・学生の自主性が重要<br>・学生の向学心、目的意識<br>・内発的動機付けの必要性                        |
|          | 学力の捉え方                | ・学力の定義  |

### 3 結果

#### 3.1 評定結果と回答者の属性

自由記述として何らかの記載があったもののうち、どのカテゴリも要素として含まない回答が488件あり、最終的に、2,038件が分析に使用するデータとなった。本研究で規定したカテゴリを含むと評定された回答件数と「2004 国公私」調査の全回答件数(自由記述部分の無回答を含む)に対する割合について、大学の設置形態別、学部系統別に集計したものを表2、表3に示す。

表2 規定カテゴリを含むと評定された回答件数とその割合(設置別形態)

| 所属大学    | 件数  | 割合(%) |
|---------|-----|-------|
| 国立大学    | 897 | 17.8  |
| 公立大学    | 199 | 17.9  |
| 私立大学    | 939 | 17.7  |
| 空白・無効回答 | 3   | -     |

表3 規定カテゴリを含むと評定された回答件数とその割合(学部系統別)

| 学部系統      | 件数            | 学部系統    | 件数            |
|-----------|---------------|---------|---------------|
| 法学系       | 48<br>(16.0)  | 医学系     | 179<br>(14.4) |
| 経済・商学系    | 179<br>(19.5) | 歯学系     | 41<br>(15.2)  |
| 文学系       | 194<br>(16.5) | 薬学系     | 65<br>(21.5)  |
| 社会学系      | 61<br>(19.0)  | 保健・看護学系 | 39<br>(15.6)  |
| 教育学系      | 74<br>(18.6)  | 介護・福祉系  | 29<br>(15.0)  |
| 外国語学系     | 56<br>(17.2)  | 家政・生活科系 | 45<br>(16.7)  |
| 教員養成系     | 108<br>(19.3) | 芸術学系    | 42<br>(18.9)  |
| 理学系       | 170<br>(19.6) | 体育学系    | 19<br>(12.3)  |
| 工学系       | 393<br>(18.5) | 情報学系    | 36<br>(20.7)  |
| 農・獣医・水産学系 | 124<br>(17.6) | その他     | 53<br>(20.1)  |
| -         | -             | 空白・無効回答 | 82            |

( )内は割合(%)

#### 3.2 全体の傾向

全体の結果を巻末の別表に示す。評定件数が多い(100以上)カテゴリを観点別にみると、『学力低下の有無』観点の「有り(442件)」、『意欲低下の有無』観点の「有り(232件)」、『低下している能力』観点の「基礎学力(131件)」 「国

語力 (144 件)、『問題点』観点の「学力、意欲の格差 (113 件)」「主体性の欠如 (171 件)」「学力以前の問題 (131 件)」「大学の実状 (104 件)」「(学生の)目的、目標、動機の欠如 (140 件)」、『背景・原因』観点の「大学入試 (130 件)」「ゆとり教育 (134 件)」「大学入学以前の教育 (244 件)」「進学率の上昇 (105 件)」「大学入学以降の教育 (125 件)」「社会構造、風潮 (167 件)」、『提案・期待』観点の「基礎学力の充実化 (152 件)」「大学教育の変革、工夫 (367 件)」「大学入学以前の教育改善 (246 件)」「社会構造、風潮の改善 (124 件)」である。

### 3.3 観点別の分析

「2004 国公私」調査項目、石井他 (2005) の結果と比較をしながら、各観点について分析する。

まず、『学力低下の有無』と『意欲低下の有無』の観点では、学力、意欲の低下について明示している回答もしくは、明らかにその意味を含んでいるものに対してのみ学力低下もしくは意欲低下「有り」と評定した。しかし、「有り」と評定されない回答の中にも学力、意欲の低下を前提として回答していると考えられるものも数多く存在し、その潜在数はデータの実数値よりもかなり多いことが予想される。

『低下している能力』観点では、「国語力」の低下が問題視されていることが特徴的である。これは、「基礎科目の理解や外国語力よりも、日本語力の低下が意識されていることは注目すべきことである」(石井他, 2005) という指摘とも一致するところである。さらに、佐藤・倉元 (2006) は、項目反応理論で尺度化された 5 肢選択式のテストを用い、1991~2003 年の 10 年余りの間に高校生

の語彙力が相当程度低下していることを見出したが、大学教員の実感はその結果とも符合するものである。

また、「基礎学力」「論理的思考」「伝達能力」「忍耐・集中力」の各能力については、「2004 国公私」調査項目の「学力低下の具体的内容」に含まれる要素とほぼ合致する。

『問題点』観点は、学力、意欲低下に関して実際に何が問題なのかという意見を含むものである。「主体性の欠如」は、「2004 国公私」調査項目の「学力低下の具体的内容」に含まれる要素、「学習方法の無知」「学力以前の問題」は、「学生の勉学態度」として示されている要素と合致する。また、「主体性の欠如」は、学部系統の医学系において、その他の学部系統との関係よりも相対的に高く意識されており、『主体性欠如』についての(医学系)教員による学生の学力低下意識が相対的に強い」という石井他 (2005) の指摘を裏付ける結果にもなっている。一方、「(学生間の) 学力、意欲の格差」「大学間格差」「大学の実状」「(学生の) 目的、目標、動機の欠如」は、「2004 国公私」調査項目には含まれない要素である。特に、「学力、意欲の格差」に評定された回答は、113 件と比較的多く、設置形態別にみると私立が 62 件 (6.6%)、国立が 46 件 (5.13%)、公立が 5 件 (2.51%) であった。石井他 (2005) の「公立は、保健・看護のように単科の大学も多く、志向性の高い学生が入学してくるので、教員における学生の学力低下意識が相対的に低い」という指摘と合致した結果である。

『背景・原因』観点は、学力、意欲低下に関して、その背景や原因を指摘した意見をカテゴリー化したものである。「大学入試」「科目選択制度」「知識軽視」

「大学入学以前の教育」「大学入学以降の教育」は、「2004 国公私」調査の「学力低下の対策」に関する項目に含まれる要素を持つカテゴリーである。一方、「マークシート方式」「ゆとり教育」「進学率の上昇」「学習環境の変化」「社会構造、風潮」は、「2004 国公私」調査項目には含まれない新しい要素を持つカテゴリーである。中でも「ゆとり教育」「進学率の上昇」「社会構造、風潮」は、評定件数が 100 を超え、多くの回答者がこれらに関して何らかの意見を持っていることが分かる。

『提案・期待』観点は、学力、意欲低下に対して、どう対処していくべきかという意見を含んでいる観点である。「大学入試の改善」「必要科目数の増加」「基礎学力の充実化」「大学教育の変革、工夫」「大学入学以前の教育改善」は、「2004 国公私」調査の「学力低下の対策」に関する項目に含まれる要素を持つカテゴリーである。一方、「試験形式の論述、記述化」「センター試験改善」「センター試験の資格化」「卒業認定の厳格化」「家庭教育、環境の改善」「大学の淘汰」「大学の役割の再考」「社会構造、風潮の改善」「精神論」が、「2004 国公私」調査の項目には含まれない新しい要素を持つカテゴリーである。

『学力の捉え方』観点は、学力そのものの定義が何なのかを明確にすべきであるという意見を含むものである。「国公私 2004」調査の趣旨とは異なるため、調査項目には含まれていないが、23 件が当該カテゴリーに評定された。

#### 4 考察

本研究では、「国公私 2004」調査における回答者の自由記述式回答にどのような意見が含まれているかをカテゴリー

一化した。その際、回答者の意見の分類とカテゴリー化の作業が「国公私 2004」調査の項目や内容による先入観の影響を避けるために、それらに関する資料や論文を参照せずに作業を行った。そのため、懸念していた先入観による影響は、回避できたと考えられる。その結果、自由記述回答に特徴的なカテゴリーを得ることができた。以下に主要なものについて個別に考察する。

まず、『問題点』観点の「人的・財政資源の制約、大学教育の質の低下、大学の経営」といった意味を含む「大学の実状」のカテゴリーについてである。設置形態別にみると私立の 70 件 (7.45%) は、国立の 27 件 (3.01%)、公立の 7 件 (3.52%) と比べ相対的に私立が多い。これは、「大学全入時代」の到来へ向けた「大学サバイバル」(古沢, 2001)とも呼ばれる大学間競争の激化、統合再編など生き残りをかけた私立大学の実状を窺うことができる。

『背景・原因』観点の「マークシート方式」では、同カテゴリーに評定された 58 件の回答のうち、12 件が『提案・期待』観点の「試験形式の論述、記述化」にも同時に評定されている。また、『低下している能力』観点の「論理的思考」とは、11 件が同時に評定されている。つまり、「マークシート方式という簡単な選択法で決定させる方法自体が、論理的思考力、文章表現力、自己意志の論理的表現能力の育成において、大きな欠陥となっている」といった回答に代表されるように、マークシート方式を懸念する理由として、その方式が論理的思考力や文章表現力等の欠如へ繋がると考えているようである。

同観点の「進学率の上昇」カテゴリーでは、「大学での学力低下は、少子化、

進学率上昇、学生全入になれば必然生じる現象」といった、進学率が上昇すれば学生の学力が低下してくるのは自然な現象と考えている回答者が多い。これは、日本の大学が、Trow.M (1976 訳書) のいう「ユニバーサル段階」へ移行したことを教員が実感しているとも言えるだろう。さらに、大学のユニバーサル化を肯定的に捉えている回答者は、大学の役割として「ユニバーサル段階」に則した役割を望んでおり、反対に、大学がユニバーサル化することを否定的に考えている回答者は、大学の役割について「エリート段階」、または「マス段階」に特徴的な役割を望んでいると考えることができる。本研究では、こうした意見構造を実証的に示すまでには至っていないが、『提案・期待』観点において「大学の役割の再考」や「大学の淘汰」というカテゴリーが抽出されたことを考えると今後の検討に値する着眼点である。

『背景・原因』観点の「社会構造、風潮」には、「社会全体が刹那的な楽しさ、面白さを求める風潮がある」といった学校教育や大学教育の範疇を超えた問題だと捉えている回答が存在する。こうした回答の167件中20件は、『提案・期待』観点の「社会構造、風潮の改善」を望んでおり、現在の学力、意欲低下問題を社会的な文脈において根の深いものとして捉えていることが窺える。また、「ゆとり教育」については、行政が進めてきた初等中等教育の「ゆとり教育」への懸念（大森,2000 など）を反映しているのだろう。

最後に、本研究が抱える方法論的な課題について触れておく。カテゴリー評定によって、0-1の2値に数値化したときに、本研究で取り扱ったデータは、「学力低下の有無」や「意欲低下の有無」を

除いた各カテゴリーへの反応は多くても10%未満と低い出現頻度であった。上記のような問題は、質問内容に「簡条書きをお願いします」といった教示を加えることである程度改善されるかもしれない。しかし、豊田・前田(1994)は「簡条書きは回答者の思考に一定の枠をはめる働きをするので、回答者自身の体験に基づく緻密な論理展開は期待できなくなる」と指摘している。したがって、本研究の目的が、自由記述から新しい観点を見出すことにあり、回答者の幅広い意見に関心がある以上、統計的な諸問題を抱えることはある程度仕方がないだろう。その反面、全回答を内容的に十分に検討したことにより、大学教員の意見の多様さをカテゴリーに反映できたと考えられる。

以上、本研究の分析結果として得られた知見が、今後の「学力低下」問題を検討していく上で、参考資料の一つとして利用されることを期待したい。

#### 注

- 1) この600学部は、「平成13年度全国大学一覧」をもとに、全国大学を国公立に分け、それぞれの学部を国公立は1/2、私立は1/3を無作為に抽出したものである（石井他, 2005）。
- 2) 1学部に所属する教員が100名以下の場合には全数、100名以上の場合は100名を無作為に抽出している（石井他,2005）。
- 3) 柳井・前川他（1993）、鈴木他（2000）、柳井・椎名他（2002）など。
- 4) 評定に関する信頼性について、西郡・倉元（2006）は、同じ手続きを用いて、他のデータに対して、2人が評定作業を行ったところ、その一致度は、65.34%であった。したがって、当研究の評定も同程度の信頼性を有するものと考えられる。

## 付記

本稿は、平成 15-17 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基礎研究 B (1)、研究課題番号 15330144 (研究代表者 柳井晴夫)「大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究」の調査結果の一部を利用した。

## 参考文献

古沢由紀子, 2001, 『大学サバイバル』集英社.

石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木規夫・荒井克弘・大竹洋平, 2005, 「大学生の学習意欲と学力低下に関する大学教員の意識についての調査研究」『大学入試センター研究紀要』 34:1-17.

中野重人, 2002, 『学力低下論とゆとり教育』明治図書.

西郡大・倉元直樹, 2006, 「日本の大学入試をめぐる公正研究-社会心理学的アプローチの試み-」『日本テスト学会第 4 回大会発表論文抄録集』 4: 76-79.

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄, 1999, 『分数ができない大学生-21 世紀の日本が危ない-』東洋経済新報社.

大森不二雄, 2000, 『ゆとり教育亡国』PHP 研究所.

佐藤洋之・倉元直樹, 2006, 「高校生における日本語基礎能力の変化について」『行動計量学』 33.2:167-178.

鈴木規夫・荒井克弘・柳井晴夫, 2000, 「大学生の学力低下に関する調査結果について」『大学入試フォーラム』 22:50-56.

豊田秀樹・前田忠彦, 1994, 「大学入試方法の改善に関する進路指導担当教員からの自由記述意見の分析-

調査研究における自由記述データの分析方法の提案-」『行動計量学』 21.1:75-86.

Trow, Martin (天野郁夫・喜多村和之訳), 1976, 『高学歴社会の大学-エリートからマスへ-』東京大学出版会.  
柳井晴夫・前川眞一・鈴木規夫・石塚智一・豊田秀樹, 1993, 「大学の各専門分野の進学適性に関する調査研究報告書-大学入学者選抜資料としての適性検査のための基礎研究」大学入試センター.

柳井晴夫・椎名久美子・石井秀宗他, 2002, 「大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究, 平成 12,13 年度文部科学省教育改革推進のための総合的調査研究委託報告書」高等教育学力調査研究会.

柳井晴夫・石井秀宗・椎名久美子・伊藤圭・鈴木規夫・前田忠彦・荒井克弘, 2006, 「大学生の学習意欲と学力低下に関する調査結果の総合報告」『大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究』平成 15-17 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基礎研究 B (1), 研究課題番号 15330144 研究代表者 柳井晴夫 研究成果報告書 1-37.

柳井晴夫, 2006, 「大学正の学習意欲と学力低下に関する実証的研究 補足資料」『大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究』平成 15-17 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基礎研究 B (1), 研究課題番号 15330144 研究代表者 柳井晴夫.

別表

各観点とカテゴリーの評定数と属性別の集計表

| 観点       | カテゴリー   | 評定数 | 国立        | 公立       | 私立        | 1       | 2        | 3       | 4       | 5       | 6       | 7       | 8       | 9       | 10      | 11      | 12      | 13      | 14      | 15      | 16      | 17      | 18      | 19      | 20      |
|----------|---------|-----|-----------|----------|-----------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 学力低下の有無  | 有り      | 442 | 189(13.0) | 47(2.6)  | 208(11.9) | 14(0.8) | 44(2.6)  | 71(4.0) | 71(4.0) | 22(1.2) | 22(1.2) | 26(1.5) | 39(2.2) | 59(3.3) | 19(1.1) | 39(2.2) | 49(2.8) | 16(0.9) | 9(0.5)  | 6(0.3)  | 3(0.2)  | 11(0.6) | 11(0.6) | 9(0.5)  | 15(0.8) |
|          | 無し      | 79  | 41(6.5)   | 17(6.0)  | 26(7.7)   | 3(0.2)  | 11(5.7)  | 11(6.4) | 4(4.1)  | 4(4.1)  | 2(0.5)  | 2(0.5)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 2(0.5)  | 2(0.5)  | 2(0.5)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  | 3(0.8)  |
|          | 分からぬ    | 33  | 18(1.4)   | 6(0.9)   | 14(0.8)   | 1(0.1)  | 3(2.2)   | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  | 3(2.2)  |
| 意欲低下の有無  | 有り      | 232 | 95(10.2)  | 24(12.0) | 118(12.3) | 8(1.6)  | 33(16.4) | 46(8.6) | 34(6.5) | 34(6.5) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) | 11(2.1) |
|          | 無し      | 31  | 14(1.5)   | 5(2.1)   | 14(1.4)   | 1(0.1)  | 3(1.5)   | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  |
|          | 分からぬ    | 21  | 8(0.9)    | 5(2.1)   | 8(0.8)    | 0(0)    | 3(1.5)   | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  | 3(1.5)  |
| 低下している能力 | 読解力     | 131 | 56(6.2)   | 17(8.5)  | 57(6.7)   | 3(0.3)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
|          | 算数力     | 144 | 48(5.5)   | 17(8.5)  | 79(6.4)   | 3(0.3)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
|          | 読解・算数   | 87  | 39(4.5)   | 17(8.5)  | 34(3.6)   | 3(0.3)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
| 問題点      | 学力向上の意欲 | 45  | 18(2.1)   | 4(2.0)   | 23(2.4)   | 0(0)    | 5(2.3)   | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  | 5(2.3)  |
|          | 読解・算数力  | 33  | 12(1.3)   | 1(0.5)   | 18(2.0)   | 0(0)    | 4(2.2)   | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  | 4(2.2)  |
|          | 学力向上の意欲 | 113 | 45(5.1)   | 2(2.1)   | 62(6.9)   | 1(0.1)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
| 背景・原因    | 学力向上の意欲 | 28  | 8(0.9)    | 2(1.0)   | 18(1.9)   | 0(0)    | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
|          | 学力向上の意欲 | 171 | 77(8.5)   | 21(10.5) | 73(7.7)   | 1(0.1)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |
|          | 学力向上の意欲 | 131 | 49(5.6)   | 11(5.3)  | 71(7.5)   | 4(0.8)  | 11(5.9)  | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) |
| 授業・期待    | 学力向上の意欲 | 104 | 21(3.0)   | 7(3.2)   | 70(7.4)   | 4(0.8)  | 11(5.9)  | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) |
|          | 学力向上の意欲 | 146 | 51(6.8)   | 16(8.0)  | 63(6.7)   | 4(0.8)  | 11(5.9)  | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) | 11(5.9) |
|          | 学力向上の意欲 | 130 | 65(7.2)   | 10(5.0)  | 54(5.7)   | 1(0.1)  | 10(5.9)  | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) | 10(5.9) |

( ) 内は、各属性別に評定された総数に対する割合

※ 1~20 については、所属する学部系統を示す  
 1:法学系, 2:経済・商学系, 3:文学系, 4:社会学系, 5:教育学系, 6:外国語学系, 7:教員養成系, 8:理学系, 9:工学系, 10:農・獣医学系, 11:医学系, 12:歯学系, 13:薬学系,  
 14:保健・看護学系, 15:介護・福祉学系, 16:家政・生活科学系, 17:芸術学系, 18:体育学系, 19:情報学系, 20:その他